

被災地の現状を見つづけること

あいのままの被災者の思いを受け止めること

全労連 岩手被災地ボランティア派遣レポート — その①

8月29日から9月1日の4日間（ボランティアは中2日間のみ）全労連の東日本大震災被災者救援ボランティアに東京民医連から学生を含む12名が参加。

東京からバスで8時間の移動を経て岩手県大船渡市へ。ボランティア登録を行い、徒歩で大船渡市民体育館へ。向かう途中の信号機は壊れたまま、踏切を渡りながら周りを見ると線路が寸断されている。

この日は大船渡市の開催している「義援物資の配布会」の手伝い。体育館前にはすでに入場を待つ長蛇の列。建物の1階と2階の間の部分まで津波が押し寄せたという。外壁に残った跡が津波の高さを物語っていた。

被災者は我慢を重ねている

作業は山積みになった支援物資を見やすいように陳列し、なくなれば山積みの箱を開けてまた陳列する。4日間の開催最終日ということもあり、すでに前日までになくなった物資もあった。トイレットペーパーや石ケンなどの消耗品はあっという間になくなったという。要望にあったものを探し出す手助けや会場内の案内、次から次と空になった段ボールの解体をおこなった。「手に持ち帰れるだけ」とお願いしていたが、両手に抱えきれない程の物資を袋につめる人、何度も入場しようとして係員に止められた人の姿も。

お昼休憩をともにした地元ボランティアはそんな状況を「全国の皆さんから支援いただいているのに、恥ずかしい。最初は譲り合いの精神があったのに。」とぼやいていた。我慢を強いられつつづけていることが、被災地の人々の心に溝を生んでしまっているのではないかと思った。

支援物資は引き続き必要

介護者を抱えた家族とおぼしき中年の女性は、紙オムツを遠慮がちに手に取りつつ、「こんなにたくさんあるのなら、もっと前からほしかった。震災直後はとにかく手に入らず困って市に相談したら、2〜3枚手渡されて、『これで我慢してください。』って言われたんですよ。」と切実な状況を話してくれた。震災直後から届いた支援物資が配りきれず、ようやく整理されて配布できるようになったものもあるようだ。

近隣のコンビニエンスストアはすぐに立ち直り、スーパーも仮設での営業を再開しているというが、職場が被災して職がない、現金収入がない中、まだまだ現地では支援物資は必要だと感じた。

多くの行政職員も被災して、震災直後はとても一つひとつの要望に応えられるような状況もなかっただろうことを思うと、せめて今、行き場のない思いを受け止めることが必要なのだと感じた。

（東京民医連事務局 村上 絵理子）

